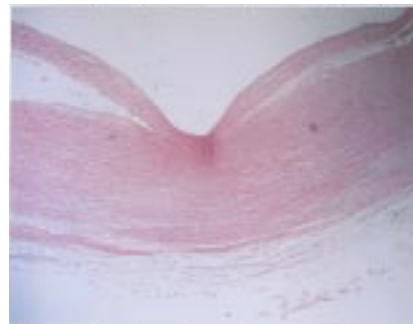


# 生体糊作用による 血管解離腔閉鎖装置の開発

企業 / 山本ビニター株式会社

研究者 / 澤田 敏（関西医科大学放射線科学教授）

藤井弘史（関西医科大学胸部心臓血管外科学医員）



高周波誘導加温によって解離した大動脈壁の溶着が得られた。

急性大動脈解離は大動脈中膜が大動脈の長軸方向に裂けてできた解離腔に血液が流入することにより突然発症し、適切な治療を行わなかった場合、発症後1週間以内に約70%が死亡し、人工心肺（体外循環）を必要とする手術を施行しても20%から40%が死亡する重篤な疾患である。今回の研究の目的は侵襲著しい外科手術に代わる低侵襲な治療、すなわち血管内操作と体外からの高周波誘導加温のみで大動脈解離が治療可能な高周波誘導加温装置を開発することである。方法は人工的にイヌの大動脈に解離を作製し、大動脈内に自製の金属ステント（自己拡張力があり、この拡張力によって解離した膜を元の大動脈壁へと押し付け、更に高周波の収束体となる性質を有する）を留置し、高周波誘導加温を行った。結果は誘導加温により解離した膜と大動脈壁との溶着が得られ、8ヶ月までの経過観察において誘導加温による合併症は認められていない。臨床応用のためには更なる基礎研究の積み重ねが必要であるが、高周波を利用したこの方法は急性大動脈解離の新しい治療法となる可能性を有する方式であることが確認された。